



PETITE
ENCYCLOPÉDIE
LAROUSSE

角川世界名事典 ラルース

監修 今西錦司 河盛好蔵



角川世界名事典 ラルース



PETITE
ENCYCLOPÉDIE
LAROUSSE

監修者略歴

今西錦司（いまにしきんじ）

1902 年（明治 35 年）生まれ。動物生態学者。人類学者。登山家。探検家。理学博士。京都大学卒業。元京都大学人文科学研究所教授。前岐阜大学学長。著書に「生物社会の理論」「生物の世界」「人間以前の社会」「人間社会の形成」「日本山岳研究」「私の進化論」「ダーウィン論」、随筆に「山岳省察」「私の自然観」などがある。1979 年文化勲章受章。

河盛好蔵（かわもりよしぞう）

1902 年（明治 35 年）生まれ。フランス文学者。評論家。京都大学仏文科卒業。東京教育大学教授を経て、現在共立女子大学教授。日本芸術院会員。著書に「フランス文学随想」「フランス手帖」「フランス文壇史」、翻訳に「マノン・レスコー」「山師トマ」、評論に「河岸の古本屋」「ユーモアとエスプリ」などがある。1979 年「パリの憂愁」で第 6 回大佛次郎賞受賞。



角川世界名事典 ラルース

定 価 22,000 円

初 版 昭和 55 年 6 月 20 日

監修者☒今西錦司／河盛好蔵

発行者☒角川春樹

印刷者☒横山 弘

製本者☒鈴木俊一

発行所☒角川書店

東京都千代田区富士見 2—13—3 〒102

振替口座 東京 3—195208

電話 03—265—7111（代表）

製版・印刷	横山印刷株式会社
本文用紙	王子製紙株式会社
表紙クロス	ダイニツク株式会社
製 函	三真堂印刷紙器株式会社
製 本	株式会社 鈴木製本所

装丁者☒大沢泰夫

© Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

0501-002000-0946(0)

刊行のことば

フランスのラルース社と契約を結び、ここに本書を世に送り出すことを小社はたいへん意義深いものと考えております。

ラルース社の百科事典といえば、百年余の伝統をもち、フランスはもとより全世界に名を知られた最も定評あるものであります。書店の創立者であり、かつ文法学者であるピエール＝ラルースの編纂になる『19世紀世界大辞典』は世界的に記念すべき大事業とされ、それに続く『20世紀ラルース』『ラルース大百科事典』などもフランス文化史に大きく貢献し、ひろい信頼を勝ち得てきました。とりわけ、国民のあらゆる層を対象に刊行した一卷本の『絵入りラルース小辞典』（通称『プチ・ラルース』）は、フランスのすべての学生が座右に備えているといわれるほどの普及率を示しております。この『プチ・ラルース』は、前半が「ことばの辞典」、後半が「固有名詞の事典」で成る小項目方式の便利な辞典で、わが国でも大分以前から、フランス文化の学習・研究者はみな机上にこれをそろえて利用してきました。

このたび小社が刊行する本書は、その『プチ・ラルース』の姉妹編ともいべきもので、ラルース社が新たに企画出版したものであります。

現代に生きる私たちは、日ごろ実におびたらしい知識や情報にとりかこまれて過ごしております。学問・研究の分野もますます細分化され、こうして得た知識の断片のひとつひとつが、私たちのどの部分にとってどのように有意義なのかを見極めることは非常に困難になってきております。ある限られた領域での貴重な発明・発見が、他の領域ではきわめて深刻な問題を引き起こすといった事例は枚挙にいとまがありません。こうした状況に正しく対処するためには、新しいヒューマンイズムの視点から、あらゆる知識を分類しなおし、その起源から現在までの進行過程をじっくりながめてみるという作業がどうしても必要になってきます。がむしやらに知識量を追い求めるのではなく、その知識が全体の中でどういう意味をもつのかを、世界とか人類という巨視的立場から、冷静かつ明快に整理することでありましょう。こうした時代の要請にこたえてこそ、これからの時代を生きる、世界的視野に立った、豊かな人間性がはぐくまれていくのではないのでしょうか。

ラルース社が本書『プチット・アンシクロペディー・ラルース』を世に問うたとき、その内容に接し、これこそ私たちがまさに待望していたものであるという確信を得ました。小項目方式の『プチ・ラルース』と対をなすという意味もあって、大項目方式が採られておりますが、それは単なる形式上の問題にとどまるものではありません。この大項目主義による本書は従来の学問の枠をとり払い、新たな諸科学の内的関連を重視して、「世界の総体的なビジョン」を得

ようというギ=ラシェ編集長の意欲のあらわれに ほかならないのであります。
現代の要請を鋭敏に感じとって編纂された本書は、第一級の執筆陣によるすぐれた記事内容、豊富でオリジナルな写真や資料、小項目も自在に引けるよう工夫されたところにくいばかりの編集などによって、新しい試みにみごとに成功したと申せましょう。

このような判断から、小社は早速本書の翻訳出版を企画してラルース社と独占契約を結び、それ以後、大勢の方々の献身的な御協力をいただいて、ついにここに刊行の運びとなりました。内容も体裁もまさに現代にマッチしたこのコンパクトな一巻本が、わが国の事典史上に新たな一ページを加え、御家庭、学校、事務所などにひろく迎えられて、まさに国民的な座右の書として親しまれ御利用いただければ、喜びこれに過ぎるものではありません。

昭和 55 年 5 月

角 川 書 店

監修のことば

『角川世界名事典ラールス』の翻訳出版の相談を受けたとき、われわれは迷うことなくこの卓抜な企画に賛意を表し、その実現に大きな期待を寄せた。

辞書・事典の出版に一世紀に及ぶ輝かしい伝統をもつラールス社のさまざまな事典は、多年の経験に裏づけられた着実に豊富な内容と斬新な方法をもち、これをわが国に紹介することは今日きわめて有意義なことに考えられるからである。

しかも、この度の新しい事典は、現代人に現代知識の完全なパノラマを提供するという最も時宜をえた方針に基づいて編集されている。その特色の第一は、内容が「地球の発見」「人間と社会」といった大項目別に構成されていることである。これは、従来の事典に見られる断片的知識の羅列をさけ、相互に浸透し合っている現代の諸学問を総合的にとらえんがためである。また、すべての問題が西欧世界に偏ることなく、全世界的視野において取り上げられていることも特筆しなくてはならない。この事典が扱う範囲は、空間的にも時間的にもわれわれの知的興味の及ぶすべての分野にわたっているといえることができる。たとえば生物についていえば、分子の段階から組織、臓器、成体に及び、太古の生物の生成から、現在、地上に生息する生物に及び、単細胞から高等動植物に及ぶ。また、受精学から遺伝学、人間の病気・治療に及んでいる。すべてがこの調子で、地球の物理・化学的性質から宇宙のそれらまで、また人類の過去から現代世界の芸術、技術に至るまで扱われているのである。執筆者は第一流の学者を集め、原書 1500 ページの一冊に、最新の学界の成果をとり入れた現代の知識の集大成が圧縮されているために、この事典を精読することは万卷の書を読むのに匹敵するであろう。オリジナルな多数のカラー写真や図表もまた貴重で楽しい。

われわれの日本語版では、わが国の諸事情を十分に考慮して、慎重な「日本化」を行うことに努力した。まず翻訳は、実力ある専門の諸氏に分担を請い、訳文の正確と平明を期した。また日本に関する事項で、更に詳細な説明が望ましいと判断される箇所には、特にその分野の専門家に依頼して、解説文や年表などの増補を行った。それから見出しは、原書の直訳では、日本の読者にとってやや抽象的すぎるように思われたので、平明なことばで補った。原書は小項目方式にも利用できるように巧みに工夫されているが、本書には原版よりも詳細な索引を付した。更に、新しく作成した用語解説集を加えて、いっそう利用者の便をはかった。原書のユニークな斬新さが損なわれることなく、信頼しうる日本版一冊百科の誕生がわれわれの念願するところである。

歳月を要する共同作業であるために、幾度も討議検討を行ったことはもちろ

んであるが、あくまでも翻訳が中心となっているために訳者や編集技術の面で、書き下ろしの場合とはまったく異なるさまざまな困難に出会わねばならなかった。幸いに、訳者・協力者の熱意と努力によって、ここに本書を刊行するに至ったことは喜びにたえない。新しい時代に向けられた本書の卓抜な意図と長所がよく理解され、ひとりでも多くの読者に活用されることは、監修者の心からの願いであり、本書を推せんする理由である。

昭和 55 年 5 月

今 西 錦 司
河 盛 好 蔵

〔凡例〕

1 本文中の片仮名表記については、人名・地名の場合は、原則として原音に基づく表記を採った。ただし見出しにおいては読者の便宜を考慮して、慣用的な表記と原音に近い表記を併記した。例えば本文中では César (Caesar) はカエサル、Venise (Venezia) はヴェネツィア、見出しではシーザー (カエサル)、ベネチア (ヴェネツィア) とした。

また一般の片仮名外来語については、原則として慣用的な表記を採用した。例えば violon, romantique はそれぞれバイオリン、ロマンチックとした。

原綴がわから書きされている場合は、片仮名表記もわから書きにし、ハイフン (二語以上をつなぐために使う短い線) で結んだが、人名には「=」、地名その他には「-」を用いた。例えば Winston Churchill はウィンストン=チャーチル、New York はニュー=ヨーク、ancien régime はアンシャン=レジームなど。

2 本書で用いた『』は書名を、「」は雑誌名、論文、美術・音楽の作品名、引用文を示す。また“ ”は原文のイタリック体および《 》の部分に対応し、

強調を意味する。

3 索引は五十音順に並べたが、アルファベット語はすべて英語読みによって配列した。例えば NATO (北大西洋条約機構) はエヌエーティーオー、IMF (国際通貨基金) はアイエムエフなど。

同音同字でまぎらわしい場合は〔 〕内に類別を入れた。また書名・作品名のあとでは必要に応じて〔 〕内に著者名・作者名を入れた。例えば干渉〔心理〕、干渉〔物理〕、「嵐」〔フラゴナール〕、「嵐」〔ブリュゲル〕など。

また言いかえや補足説明は() 内に入れて処理した。例えばアイコノスコープ (撮像管)、キネティック (動く美術) など。

片仮名表記の見出しについては、本文で用いた原音に基づくものを本見出しとしたが、検索の便をはかって慣用的表記をから見出しとした。から見出しの所では解説を省略し、「→」を用いて本見出しを参照できるようにした。例えばベトナム→ヴェトナム、ピタゴラス→ピュタゴラスなど。

4 日本語版として特に、本文中の重要語には、* 印をつけ、巻末の用語解説集で説明を加えた。配列については索引と同様である。

① 地球の発見—— 1

世界の探検—— 2

ナイル川とその水源に関する問題／4 サハラ砂漠／5 インド航路／8 クリストファー＝コロンブスとカリブ世界の発見／11 コロンブスのアメリカへの航海／12 中央アメリカとアンデスの探検／13 太平洋の航海／15 アメリカ北部の探検／17 北極探検／20 南極探検／21

地 質—— 24

地質学とその歴史／24 地球の大きさと組成／26

岩石の研究 29

鉱 物 29

鉱物の研究／29 主な鉱物の種類／32

岩 石 33

岩石の研究方法／34 岩石の分類／34 表成岩／34 火成岩／36 変成岩／37

地質の年代 38

地層の相対的編年(相対年代)／39 地層の絶対的編年(絶対年代)／41

地球の歴史のあらまし 42

先カンブリア代／43 古生代／43 中生代／44 新生代第三紀／45 新生代第四紀／45

地質の現象—— 45

地球の内部 45

構造地質学／45 山脈の形成／47 変成作用と花崗岩^{がらんどう}の形成／47 火山作用／48 火山の産物／48 噴火活動後の火山活動／50 火山の噴火／50 火山の型／51 世界における火山の分布／52 フランスにおける火山活動／53 地震／53 造山運動に関する主要な学説／55

地球の外部(地形) 62

岩石の風化と土壌^どの形成／62 重力による移動／64 流水の作用／64 沢／64 水系／64 石灰岩地域の地形／66 地質構造の地形に対する影響／67 気候の地形に及ぼす影響／67 湖／69 海／70

気象と気候—— 71

気象のデータ 72

地上での観測／72 上空での観測／73 データの処理と伝達／73

大気の流れ 74

気団／74 前線(フロント)／74 風／74 一般的な循環／75

水蒸気による現象 76

露と霜／76 もやと霧／76 雨氷／77 雲／77 降水／78 雨のいろいろな型／78 雷雨／79 熱帯性低気圧(サイクロン)／79

天気予報 79

気 候 80

気候の諸要素／80 宇宙的な要素／80 地球上の大気の大循環による要素／82 地理的な要素／82

世界の気候区分 82

極気候／82 温帯の気候／83 亜熱帯砂漠^{さば}気候／85 熱帯内気候／86 山地気候／87 小気候(微気候)／88 生物圏への気候の影響／88

大 陸—— 88

アメリカ大陸 89

北アメリカ／89 [古期山地／89 中部平原／90 ロッキー山脈／91 大陸内部／91] 中央アメリカ／91 [アンチル諸島／92] 南アメリカ／92 [平坦な化された古期山地／92 平原の連なり／93 アンデス山脈の障壁／94]

アフリカ大陸 95

マダガスカル^{マダガスカル}の若い山脈地帯／95 世界最大の砂漠^{さば}、サハラ／96 熱帯アフリカ北部の盆地／96 赤道コンゴの盆地／97 南アフリカ／98 東アフリカの台地と地溝帯^{たいこう}／98 マダガスカル／99

ユーラシア大陸 100

ヨーロッパ／100 [ヨーロッパの古期山地／100 北欧、東欧の大平原／101 ヨーロッパ＝アルプス／102 ヨーロッパの気候と景観／103 アイスランド：隔絶した世界／104] アジア／104 [北アジア／104 中央アジア／105 中近東／105 モンスーン＝アジア／106 南アジア／106 東南アジアと中国東部／106 太平洋の周縁地域／107]

オセアニア 108

オーストラリア／108 ニュー＝ギニア／110 ニュー＝ジーランド／110 太平洋の小さな島々／110

南極大陸 111

南極大陸の厳しい気候／111 南極氷床／112 南極大陸の地質構造／112 砂漠^{さば}のような土地／112 南氷洋の島々／112

海 洋	113	地球を測 ^は る：測地学	123
海 水	113	測量の歴史	123
海の運動	113	測地学の応用	124
海底の地形	116	測地学の原理	124
大陸棚 ^{だいろく} と大陸斜面／116 大洋底／116 中央海嶺 ^{かい} ／116 海溝 ^{かいこう} ／117 海洋の生物／117		座標／124 準 ^だ 拠 ^だ 楕 ^だ 円 ^だ 体／124 等ポテンシャル面／125	
地球上の大洋	117	重力の測定	125
太平洋／117 大西洋／118 インド洋／119		アイソスタシー／126	
自然へのはたらきかけと公害	119	基本的な測 ^は るの方法	126
自然景観の改造	119	準 ^だ 拠 ^だ 面と基準点／126 測地網の構成／126 距離の測定：三角測量／127 投影法／128	
土壌 ^{どじやう} 侵食	120	人工衛星を使った新しい測 ^は る	129
水の汚染	122	天体測地学による水準測量／129 重力測定／129	
大気汚染	123	天文学的測地学／129 測地学の成果／131	
~~~~~			
② 生命と医学	133	組織／164 個体の協調／165	
生命の研究の歴史	134	遺 伝	167
アリストテレスと生命の科学の誕生／134 ヘレニズム時代とローマ時代／134 東洋の中世／135 西洋の中世／135 ルネサンス：近代科学の飛躍／136		形式遺伝学／167 集団遺伝学／169	
進化論	137	進 化	170
ラマルク以前の諸説／139 ラマルクと新ラマルク説／140 ダーウィンとダーウィン説／141 ダーウィン説の運命／142 進化論に対する哲学の立場／144		遺伝的変異と進化／170 種の生物学的定義／171 最近の進化的変化／171 地質時代の進化／172 生物の保守傾向と進化／173	
生物とは何か	148	植 物	174
生物の構造	148	植物の生理学／174	
生物と種／148 生化学的成分／148		下等植物（葉 ^は 状 ^{じやう} 植物）	174
細 胞	150	藻類 ^{そうるい} と菌類／174	
細胞膜／151 核／151 細胞質／153 細胞のエネルギー／153 有糸 ^{ゆうい} 分裂／156		高等植物	177
生物のサイクル：受精と減数分裂	156	藓苔類 ^{せんたい} ／177 シダ植物／178 種子植物／179 被子植物の分類／181	
生物のサイクル／156 一様な生殖に対する例外／158 減数分裂／158		植物の化石	184
生命の発生	160	古生代／184 中生代／185 第三紀／185 第四紀／186	
受精卵の遺伝的構成／160 卵割／160 原腸形成／162 早発の器官形成／162 細胞分化／163 発生の機能期間／164		栽培と技術	186
生命の成熟	164	園芸／187 林業／187 ぶどう栽培／187 自然の繊維原料／188 農産物／189	
		動 物	192
		ビールス	192
		原核生物	193
		細菌類／193	

真核生物	194
原生動物／194 後生動物／196	
後生動物の分類	196
海綿動物門／197 刺胞動物門／197 有櫛動物門／198 扁形動物門／198 線形動物門（円形動物門）／199 輪形動物門（ワムシ類）／199 環形動物門／199 苔虫動物門／200 腕足動物門／201 軟体動物門／201 節足動物門／203 棘皮動物／207	
脊索動物門	207
頭索類亜門／207 尾索類亜門または被囊類亜門／208 脊椎動物門／208	
生物の行動：行動生物学	214
行動生物学の意義／215	
行動の基本	216
種の保存から集団的行動へ	218
個々の生存のための闘争／218 種の保存のための闘争／219 社会生活と支配のための闘争／221 実用のわくを越えて／222	
人 類	223

### ③ 世界の思想と宗教 271

#### 宗 教 272

宗教の発生 272

アニミズム(精霊崇拜)／272 社会学的な学説／272

呪術とタブー 274

宗教の出現／274 マナ(非人格的超自然力)／274 超自然の存在／274 聖の顕現と神の顕現／275 神話と儀礼の関係／275 シンボルイズム(シンボルの体系)／276 司祭者／276 呪術／277 神聖な空間／277 神聖な時間と祭祀／278 埋葬祭式(死者の崇拜)／278 成年式の儀礼／278 祈願と供犠／280 タブーと禁止／281 占術と神判／282 救済の宗教／282

#### 神 話 282

神話の発生 282

神話についての現代の見方／283 構造主義と機能主義／283

神話の形態 284

#### 人類の起源と進化 223

霊長類の中の人類／225 霊長類の主な種類／225 第四紀／226 新人類／227 旧人類／228 更新世中期の人類／230 ヨーロッパのアルカントロプス人／231 前人類の問題／232 更新世前期の人類／232 人類以前の類人猿／236 結論／237

#### 現在の人類 237

解剖学／237 生理学／241 人類／242

#### 病気と医学 246

医学と医師／246 医学の歴史の概観／246

#### 現代の医学 247

医学教育／248

#### 病気についての学問 248

病気／249 病人／250 病気の徴候／250 病気の原因／254 病的メカニズム(機構)／256 医学研究と実験病理学／257 病気の周辺／258

#### 治療について 259

治療の場所／260 治療の方法／260 外科／263 物理的作用／265 その他の治療手段／267

神話とその背景／284

#### 人類の起源と神々 284

宇宙開闢説／285 神々の戦争／285 人間の起源／286

#### 天空の神々 286

天と地／286 太陽と月／287 天空の現象／287

#### 大地と水的神話 288

火山と地震／288 海的神話／288 水的神話／288

#### 地下の神々の神話 289

冥府(地底の世界)／289 救済宗教の誕生／290

#### 世界の六大宗教 290

##### ユダヤ教 290

ユダヤ国家／290 ユダヤ教の諸教派／291 ユダヤ教の教義／291 礼拝／291 現代のユダヤ教／292

##### キリスト教 292

イエス=キリスト／292 キリスト教の発展／292 キリスト教の勝利／293 キリスト教の教義／293 古代の異端的な諸派／294 キリスト教の秘跡／294

司祭職と品級／294 中世と宗教改革／295 現在のキリスト教の傾向／296	中世神秘思想 .....331
<b>イスラム教</b> .....296	インド哲学の現在の傾向 .....332
イスラム教の起源と伝承／296 イスラムの聖法／296 イスラム教の教義と儀礼／297 イスラム教の五つの儀礼規定／297 法の源泉としての宗教／298 スンニー正統派に対立する諸教派／298	『ヴェーダ』によらない学説 .....332
<b>バラモン教とヒンズー教</b> .....300	<b>中国の思想</b> .....334
ヴェーダの宗教とバラモン教／300 正統ヒンズー教／301 ヒンズー教の諸教派と宗教改革者／303	諸子百家 ^{しよしひ} の時代 .....334
<b>仏教</b> .....304	儒教／334 道教／336 その他の学派／337
仏陀 ^{ぶつだ} の生涯 ^{しやうかい} ／304 教法／305 上座部と大乘 ^{だいじやう} ／306 インドの仏教／306	漢代の思想 .....337
<b>ジャイナ教</b> .....307	儒教／338 道教／338 中国仏教／338
ジャイナ教団／307 ジャイナ教の教義／308 現在のジャイナ教／308	宋代 ^{そうたい} の儒教 .....339
<b>日本の宗教</b> .....308	理学／339 観念論的学派／340
日本の宗教／308 日本古代の宗教／309 仏教の受容／310 日本仏教のさまざまな流れ／311	現代の儒教 .....340
<b>古代の哲学</b> .....312	<b>イスラムの哲学</b> .....341
哲学の始まり .....312	カラムとムタカリムーン .....342
イオニアの哲学者／312 マグナ-グラエキア（大ギリシア）／313 新自然学者／314	ムアタジラ派／342 アル=アシュアリーとアシュアリー主義／342
<b>ソクラテスとプラトン</b> .....314	<b>イスラム哲学のギリシア化</b> .....343
プラトンとプラトン学派／315	近東諸国出身の哲学者たち／343 スペイン系哲学者たち／345
<b>アリストテレス</b> .....316	独立した思想家たち .....346
アリストテレスとその著作／316 アリストテレス主義／319	神秘思想とスーフィー主義 .....347
<b>実践哲学</b> .....319	スーフィー主義／347 スフラワルディーとイシューラーキーユーン派／348
エピクロス主義／319 ストア哲学／320 懐疑論／322	<b>中世の哲学</b> .....349
<b>ローマ時代の哲学</b> .....323	教会教父 .....349
ストア哲学／323 新プラトン主義／324	新プラトン主義の伝統 .....350
<b>インドの哲学</b> .....325	スコトゥス=エリウゲナ／350 聖アンセルムス／352 アベラール／353
カストの体系／325 ヒンズー教徒の理想と社会的価値／326 ヒンズー教の多様性／326	<b>アリストテレス主義</b> .....354
<b>哲学の六学説</b> .....326	アルベルトゥス=マグヌス／354 トマス=アクィナス／354 合理(理性)主義の思潮／356 スコラ学の終焉 ^{しゆうえん} ／356
ニヤヤ学派とヴァイシェーシカ学派／327 サーンキヤ学派とヨーガ学派／328 ミーマーンサー学派とヴェーダーンタ学派／329 バクティ（信愛）／330	<b>理性と哲学</b> .....357
	ルネサンスの思想 .....357
	プラトン主義／358 アヴェロエス主義／359 科学の飛躍／359
	<b>17世紀の思想</b> .....360
	ルネ=デカルト／360 ブレーズ=パスカル／361 トマス=ホップズ／361 パルーク=スピノザ／362 マールブランシュ／363 ライブニッツ／363

18 世紀の思想 .....	364	ギリシアとローマ / 377
アイザック=ニュートン / 364	経験論 / 364	歴史
哲学 / 365	唯物論 / 366	エマヌエル=カント / 366
現代の哲学 .....	367	
ヘーゲルの概念論 / 367	アルトウール=ショーペン	
ハウアー / 368	フリードリヒ=ヴィルヘルム=ニー	
チュ / 368	メーヌ=ド=ビラン / 370	実証主義 /
370	功利主義 / 370	ハーバート=スペンサー / 371
現代の論理学 / 371	実存哲学 / 372	カ本説 カント と
直観主義 / 375	プラグマティズム / 375	現象学 /
376		
政治学説 .....	377	
~~~~~		
④ 人間と社会	393	
世界の民族	394	
民族学と民族誌学の定義 / 394	民族誌学の起源と	
発展 / 394	主な民族学理論 / 397	
現代の未開人	399	
狩猟民と採集民 / 399	狩猟民と漁撈民 / 401	牧
畜民 / 403	農耕民 / 404	
未開社会とは何か	406	
未開社会の組織 / 408	未開社会の政治組織 / 412	
未開社会の経済組織 / 416		
19, 20 世紀の民族学年表	419	
社会の中の人間	422	
社会学の定義と部門 / 422	社会学の諸学派 / 424	
社会学の思考方法 / 424		
社会学の始まり	426	
歴史はギリシアに始まる / 426		
コント, マルクス, デュルケーム以前	428	
キリスト教理想主義 / 428	ルネサンスと古典主義	
/ 428	モンテスキューの社会学 / 429	
コント, マルクス, デュルケームの貢献	429	
オーギュスト=コントの社会学 / 429	カール=マル	
クスと社会学 / 430	トクヴィルとル=プレー / 430	
デュルケームと社会学 / 431		
現代の社会学	432	
ドイツの社会学 / 432	アメリカの社会学 / 433	フ
ランスの社会学 / 435		
中世の政治学説	379	
家臣と騎士制度 / 379	君主制説 / 380	共和主義的
傾向 / 380		
ルネサンスの政治学説	381	
17 世紀の政治学説	382	
18 世紀の政治学説	383	
反体制派 / 383	反抗者 / 384	精神の進歩と功利主
義 / 384	民衆の立場 / 385	エドモンド=バーク /
385		
革命の時代の政治学説	385	
新しい政治学説 / 386		
19, 20 世紀の社会学年表	434	
社会学の方法	435	
社会学的調査の分析 / 436		
調査のしかた	437	
観察方法 / 437	面談技術 / 438	実験技術 / 438
世論調査 / 438	質問表 / 439	サンプリングの方法
/ 440	観察結果の処理と分析 / 442	世論調査の利
点と限界 / 443		
社会学の部門	443	
線型図式 / 443	直接的影響: “一次” 効果 / 444	
“試験管内” の実験 / 444	選挙運動 / 445	中期的,
長期的影響: “二次” 効果 / 446		
コミュニケーションの研究	447	
社会と労働: 労働社会学	448	
労働社会学の方法と問題 / 449	組織の社会学 / 450	
社会学の役割	450	
社会学者の願い / 451	社会と職業的社會学者 / 452	
世界の経済	453	
経済とその体系	453	
中世までの経済	453	
生き延びるための経済 / 453	家の経済から農業経	
済へ / 454	中世の農業経済 / 454	
産業革命とアダム=スミス	456	
フーリエの思想 / 457		
経済学の体系: マルクス経済学とその		
流れ	458	

近代経済学：ケインズからシュンペーター まで	459	法律上のきまり：法規	491
資本主義の経済	460	法規の起源と体系 / 491	
共通の目的：利潤 / 460 利潤の源泉 / 460 国営企 業 / 461		成文法	491
現代資本主義と技術万能主義	462	憲法 / 491 条約 / 492 法律 / 492 命令 / 493 契 約 / 493	
企業の組織 / 463 マネージメント / 463		不文法	494
社会主義の経済	465	判例 / 494 慣習 / 494 法の一般原則 / 495 学説 / 495	
ソ連の歩んだ道 / 465 人民民主主義諸国 / 466		法の分類	495
世界の人口と人文地理	466	私法 / 495 公法 / 496	
世界の人口	466	社会と政治	497
世界の大陸と国家 / 468 都市と農村 / 470 就業人 口 / 471		立法権	497
世界の人口の動き	473	国民議会 / 497 上院 / 497 国会議員に関する規定 / 498 国会の権限 / 499 会期 / 499 法律の表決 / 500 監督権 / 500	
人口の増加 / 473 人口増加率 / 473 平均寿命 / 474 各年齢層の人口比率 / 475 国際的な人口移動 / 476 離村 / 476		行政権	501
政治地理学	478	共和国大統領 / 501 政府 / 502 行政 / 503 行政 活動の諸機関 / 504 行政の権限と任務 / 505 行政 に対するコントロール / 506	
政治地理学から地理政治学への傾斜	478	司法権	506
政治地理学の課題 / 479 相互依存と機構 / 479		行政裁判所 / 507 司法裁判所 / 508	
主な国際機構	480	日本の政治	510
国際連合 / 480 旧植民地の連合 / 482 東欧諸国の 諸機構 / 483 米州機構 / 484 大西洋同盟 / 484 ヨーロッパの諸機構 / 485 アジア-アフリカ諸国 間の機構 / 486 汎アラブ主義 / 487 汎アフリカ 主義 / 487		日本国憲法と民主政治	510
国際関係	489	世界の憲法と日本国憲法 / 510 日本国憲法におけ る民主政治のしくみ / 512 日本国憲法の問題状況 / 515	
国際関係の舞台の主役 / 489 均衡のメカニズム / 490		日本政治の現状と課題	516
社会と法	490	議会政治の現代的特色と課題 / 516 民意の統合 / 518 行政の民主的統制 / 520 現代の政治行動 / 521	
法の歴史	491		

⑤ 日本と世界の歴史

日本の歴史

原始時代 / 526 国家の誕生 / 526 古代国家の確立
/ 526 貴族政治と武士の発生 / 526 封建社会の形
成 / 527 内乱と一揆 / 527 天下の統一 / 528
封建社会の確立 / 528 産業と文化の発展 / 528 封
建社会の動揺 / 529 近代国家の成立 / 529 日清

戦争と日露戦争 / 530 産業と政治の近代化 / 530
日中戦争 / 531 現代の日本 / 531

世界の歴史

先史時代：原始の人間社会

旧石器時代：狩猟者の出現

旧石器時代の気候と環境 / 532 前期旧石器時代 /
533 中期旧石器時代 / 533 後期旧石器時代 / 534

中石器時代	534	帝国の終わり	580
擬旧石器時代	534	中石器時代の人々	534
新石器時代の革命	535	ゴシック・ヨーロッパの時代	580
新石器時代の交易と伝播	535	コミュニン運動	581
ヨーロッパの青銅器時代	536	アルビジョワ十字軍	582
巨石文化	536	ゲルフ派とギペリン派	582
古代オリエント	537	北欧諸国とフランス	583
古代オリエント史の資料	537	騎士団	584
メソポタミア、インダス、古代エジプトの文明	538	ヨーロッパと百年戦争	585
メソポタミアの文明	538	封建貴族の戦い	585
中東の文明	539	大きな混乱と長期にわたる不幸	585
古代エジプトの文明	540	戦争の経過と終息	586
古代オリエントの青銅器時代	541	近隣の諸国	586
中東の青銅器時代	541	スイスの独立	586
後期青銅器時代	543	神聖ローマ帝国	587
アッシリア・バビロニアの発展とペルシア帝国	545	北ヨーロッパ諸国	588
アッシリアの覇権	546	オスマン・トルコの脅威	588
新バビロニア王朝	548	イスラムの発展	588
アケメネス朝のペルシア帝国	549	イスラム以前のアラビア	588
ギリシア-ローマ時代	551	マホメットとアラブ世界の発展	589
ドーリア人の侵入	551	政治家マホメット	589
古代ギリシア	551	初期のカリフたち	590
古典ギリシア	552	ウマイヤ朝のカリフ	591
ペロポネソス戦争	553	アッバース朝のカリフ	592
アレキサンダーの大業	555	アッバース朝イスラム帝国の分裂	594
ヘレニズム時代のギリシア	557	ファティマ朝のカリフ	594
ローマの建設と揺籃期	558	イスラム諸国家の分立	595
ローマ共和制初期	560	トルコ人の進出	596
ローマの地中海への進出	560	十字軍	597
内乱(将軍たちの権力抗争)	562	イスラムの西ヨーロッパへの進出	600
ローマ帝国	563	アジアの古代	602
ローマ帝政の末期	567	アジアの先史時代	602
オリエント-ペルシア	567	インド	603
パルチア王国とササン朝ペルシア	567	東南アジア	605
パルチア王国	567	ビルマ	605
ササン朝ペルシア	568	カンボジア	606
ゲルマン民族の大移動	569	ベトナム	607
ゲルマン人	569	インドネシア	608
大移動の始まり	570	中国	608
ローマの防衛	571	朝鮮	611
蛮族の定着	571	日本	612
ヨーロッパ諸国家の形成	571	シベリアと中央アジア	614
最初のゲルマン諸国	571	アジアの中世から近世	616
カール大帝の帝国とその分割	573	インド	616
新たな蛮族の大移動	574	ネパール	619
イタリアとドイツ皇帝たち	576	ブータン	619
ビザンチン帝国	577	セイロン	619
東ローマ帝国の初期	577	ビルマ	620
ユスティニアヌスの黄金時代	577	タイ	621
ヘラクレイオスとギリシア的帝国	578	ラオス	622
聖画像破壊論争	578	カンボジア	622
マケドニア王朝と帝国の隆盛期	579	ベトナム	623
十字軍の時代	579	インドネシア	624
パレオロゴス朝と		フィリピン	624
		中国	625
		朝鮮	627
		日本	628
		西アジアの歴史	630
		オスマン帝国	630
		ペルシア帝国	633
		アフリカの歴史	634
		アフリカの種族	634
		歴史的な資料	634
		古代文明：アクスム、クシュ、メロエ	634
		大移動と人種混交	635
		初期の大王国の時代	635
		大帝国の時代	637
		ヨーロッパ人とアフリカとの出会い	638
		奴隸売買	638
		アフリカの分割の時代	639
		ヨーロッパ人の侵入に対する抵抗	640
		アフリカ	

の植民地化と独立／641	
アメリカの前史641	
アメリカ前史の資料／641 アメリカの植民／642	
エスキモーとインディアン643	
北極文化／643 原始インディアンの文明／644	
マヤとアステカ文明645	
農業の誕生／645 前古典時代：オルメカ／645 古典時代／646 後期古典時代／647	
インカ文明648	
形成期／648 古典時代／649 インカ帝国の進展／649	
19世紀までのアメリカ650	
ヨーロッパからの征服者たち／650 スペイン、ポルトガルの植民地／652 北アメリカのイギリス人とフランス人／654 アメリカの独立／655 ジョージ・ワシントン／656	
19世紀までのヨーロッパ659	
ルネサンスと宗教改革659	
宗教戦争／663	
大航海時代とフランス革命666	
ポルトガルとスペイン／667 オランダ連合州／667 フランス／668 大英帝国の台頭／669 フランス革命／670	
19世紀の世界676	
ナポレオン戦争676	
ナポレオンのエジプト遠征／676 ナポレオンの執政政治／677 ナポレオン帝政／678	
ブルジョワ王政680	
新しい支配階級／680 ベルギーの誕生／681 ロシア帝国の形成／681 イギリス帝国の形成／683 フランス帝国の形成／685 オスマン帝国の解体／686	
アヘン戦争と明治維新688	
清国の開国／688 近代日本の形成／690	
ヨーロッパ近代国家の誕生691	
イタリアの統一／691 ドイツの統一／693 第三共和国の誕生／695	
南北戦争と中南米諸国の独立696	
スペイン、ポルトガルの植民地／696 アメリカの発展／696	
20世紀の世界698	
日露戦争と第一次世界大戦698	
極東における戦争／698 第一次世界大戦／699	
ファシズムと社会主義国家の誕生702	
全体主義政権の台頭／702 危険な時代／704 両大戦間の日本／704 シyamからタイランド（タイ国）へ／704	
第二次世界大戦から“冷戦”へ705	
第二次世界大戦／705 冷戦／709	
今日の世界情勢710	
植民地帝国の終焉／710 新しい経済帝国／713 現在の傾向／714	
~~~~~	
<b>⑥ 教育と心理</b> .....717	
<b>心理学とは何か</b> .....718	
<b>心理学と哲学</b> .....718	
科学以前の心理学／718 現象学／718	
<b>心理学と生物学</b> .....718	
ドイツ心理学／719 ロシア新生理学／719 行動主義／720 ゲシュタルト理論／721	
<b>心理学と精神医学</b> .....721	
シャルコーとリボー／721 ジャネと行為心理学／722	
<b>個人差の心理学（差異心理学）</b> .....722	
ゴールトン：統計学と心理学／722 アルフレッド・	
ビネ／723	
<b>児童心理学</b> .....723	
<b>心理学と社会学</b> .....724	
<b>心理学の方法</b> .....725	
<b>実験心理学</b> .....725	
感覚と知覚／725 学習、条件づけ、記憶／727	
<b>個人の能力と知能指数（IQ）—差異心理学</b> ...730	
心理検査／730	
<b>児童心理学</b> .....734	
児童の研究方法／735 児童心理学の特殊問題／736	
<b>児童心理の発達</b> .....736	
誕生から1歳まで／736 1歳から3歳まで／737	



3歳から5, 6歳まで/738 6歳から11歳まで/738 思春期と青年期/739	
<b>精神病理学</b> .....	<b>740</b>
狂気から精神疾患へ/740 正常と病的なもの/740 精神障害の分類/741	
気分の障害.....	741
鬱状態/741 躁性 ^{まは} 興奮/742 躁鬱 ^{まは} 病/742	
妄想 ^{まう} 病.....	742
妄想病の分類/743 パラノイア/743 幻覚妄想/744	
精神分裂病.....	745
社会への異議申し立て/745 精神分裂病の主な徴候/746	
性倒錯.....	746
主な性倒錯/747	
ヒステリー.....	748
転換症状/748 ヒステリー性格/748 精神分析によるアプローチ/749	
強迫神経症.....	749
精神分析によるアプローチ/749	
恐怖神経症.....	750
臨床的見地からの恐怖神経症/750 精神分析によるアプローチ/750	
精神薄弱.....	750
規準/750 臨床的見地からの精神薄弱/751 精神薄弱の主な原因/751 精神分析によるアプローチ/751	

<b>精神分析</b> .....	<b>752</b>
フロイトと精神分析の誕生/752 精神分析の基本概念/753 無意識の言語/753 幼児性欲の発見/756 分析療法/759 1920年以後のフロイト思想の展開/760	
<b>フロイトの精神分析の発展</b> .....	762
精神分析の初期の成功/762 第一次分裂：アーダーとユング/763 第一次世界大戦後の精神分析の発展/763 第二次分裂：ランクとライヒ/765 アメリカ“文化主義”：K. ホーナイ、E. フロム/766	
<b>社会心理学</b> .....	<b>766</b>
内容分析の技法.....	766
社会における個人の態度.....	767
態度の変容/768 態度の組織化/768	
<b>集団とグループ-ダイナミックス</b> .....	769
影響、権威、“リーダーシップ”/770 ソシオメトリー（社会測定法）/770 グループ-ダイナミックス/770 社会心理学の未来の役割/771	
<b>教育とは何か</b> .....	<b>771</b>
伝統的な教育.....	771
新しい教育理論.....	772
モンテッソリの方法/772 ドクロリーの方法/772 フレネと協働学級/773 非指示的な教育/773	
<b>教育と精神分析</b> .....	773
生涯 ^{しやう} 教育.....	774

<b>⑦ 文 学</b> .....	<b>775</b>
<b>言語の研究</b> .....	<b>776</b>
言語の起源/776 言語の記述/777 チョムスキーの生成文法/781	
<b>世界の言語</b> .....	783
言語学的慣習のいくつかの型/783 言語の分類/784	
<b>口承文学</b> .....	<b>785</b>
言葉と歌/785 口承文学の創造者とその作品/786 宗教文学と世俗文学/787 口承文学の形式と主題/787	

<b>古代オリエントの文学</b> .....	<b>788</b>
エジプト文学.....	788
メソポタミア文学.....	791
ヒッタイト文学.....	793
フェニキア文学.....	794
<b>ユダヤの文学</b> .....	<b>795</b>
ユダヤ文学の言語/795 『旧約聖書』の形成/795 『モーゼ五書』/795 歴史書/796 預言者/797 詩書と知恵の書/799 第二正典と外典/799 ギリシアの作者たち/800 タルムード文学/800 カバラと中世文学/801 近代のユダヤ文学/802	

ギリシア-ラテンの文学	802	バーリ語、プラークリット語の文学	853
叙事詩	803	ドラヴィダ語の文学	854
教訓詩	804	近代インド-アーリア語の文学	856
演劇	805	その他のインド-アーリア語の文学	860
悲劇／805  喜劇／808		中国の文学	861
叙情詩	810	古典-十三經	861
ギリシアの叙情詩／810  ラテンの叙情詩／811		詩の復興	863
雄弁術	813	最盛期の文学	864
歴史	814	劇と小説	866
寓話 [㊦] 、小話、物語	817	清代の考証学と『紅樓夢 ^{こうむ} 』『聊齋志異 ^{りょうし} 』	867
キリスト教の文学	817	文芸の改革	867
キリスト教文学の言語／818		日本の文学	868
『新約聖書』	818	言語と文字／868  編纂 ^{へんさん} の時代／868  文学形式の分化／869  日本文学の黄金時代／869  歴史物／870  その他の文学形式／871  詩劇（能）／871  庶民文学の始まり／872  大坂 ^{おさか} の世紀／872  江戸時代／873	
ギリシア文学	820	現代日本文学	874
ラテン文学	822	日本文学史年表	875
中世文学	824	ヨーロッパ中世の文学	895
ビザンチン文学	825	ケルト人の文学	895
シリア文学	828	イギリス文学	896
アルメニア文学	829	スカンジナビアの文学	897
グルジア文学	830	フランス文学	897
コプト文学	831	カタロニア文学	900
エチオピア文学	831	スペイン文学	901
イスラム教以前の文学とイスラムの文学	832	ポルトガル文学	901
言語／832		イタリア文学	902
イスラム教以前のアラビアの文学	833	ドイツ文学	903
イスラム教の誕生：ウマイヤ王朝	834	ネーデルラントの文学	904
アッバース朝の“黄金時代”	834	フィンランド文学	904
アッバース朝の没落	836	ルネサンスの文学	905
イスラム時代のスペイン	837	イタリア文学	905
イスラムの文学の衰退と再生	838	スペイン文学	907
ペルシア文学	839	ポルトガル文学	909
トルコ文学	843	フランス文学	909
インドの文学	845		
サンスクリット語の文学	845		
サンスクリット語の諸文芸	847		
仏教とジャイナ教の文学	852		